

田んぼ2030プロジェクト

田んぼだより

第4号 2023年10月12日発行

田んぼの生物・文化多様性2030(略称:田んぼ2030)ニュースレター
 発行:NPO法人ラムサール・ネットワーク日本(ラムネット)水田部会
 所在地:〒110-0016東京都台東区台東1-12-11青木ビル3F
 TEL/FAX:03-3834-6566 電子メール:info@ramnet-j.org
 ホームページ:http://www.ramnet-j.org



目次

- 中干し延長 ～田んぼの生きもの根絶大作戦!～ 船橋 玲二 (NPO法人田んぼ)1～2
- 第4回ミニフォーラム「田んぼのOECM/自然共生サイトへの登録～その可能性と課題～」報告 安藤 よしの(ラムネット)理事) ...2～3
- ラムサールブランド『シギの恩返し米』の取り組み 福岡 正和(佐賀市役所 東与賀支所 総務・地域振興グループ) ...3～4
- 水田部会からのお知らせ・第6回生物の多様性を育む農業国際会議(ICEBA)の開催について、他/編集後記4

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

中干し延長 ～田んぼの生きもの根絶大作戦!～

NPO法人田んぼ 船橋玲二

春、田んぼに水を引き入れるとドジョウやタニシが顔を出し、カエルたちが一斉に鳴き始めます。これだけの生きものがいったいどこにいたのだらう?と不思議に感じるほど生命にあふれた世界が蘇ります。田んぼの水深はごく浅いので、太陽光で温められた水の中でトンボのヤゴやゲンゴロウの幼虫はぐんぐんと大きく成長します。これらの幼虫が羽化をし、オタマジャクシに足が生えて旅立っていくまでにはだいたい2ヶ月くらいかかります。

田植え後1ヶ月～1ヶ月半くらいの時期から始める作業に田んぼの水を落とし、土の表面にヒビが入るくらいまで乾かす「中干し」が広く行われています。中干しは土中の硫化水素を抑えるなどの効果を期待して実施しますが、早い時期に中干しを行うと田んぼの中で育った生きものが死滅してしまいます。オタマジャクシ、魚の稚魚、アキアカネのヤゴなど水中の生きものの多くが干涸らびて死んでしまうのです。中干し時期を遅らせ、せめてオタマジャクシが成長して上陸する頃を目安に実施すると、多くの生きものを育む田んぼに生まれ変わります。中干し時期を遅らせる対策を「中干し延期」と呼んでいます。

そもそも湿地の生きもの一種であるイネにとっても中干しはダメージのある行為なので、多くの田んぼでは必要のない作業だとの指摘があります。それにもかかわらず、全国の

田んぼで中干しが当たり前のように行われています。

これまでの数十年にわたって行われてきた環境改変、化学物質の多用、農作業体系の変更などによって、田んぼの生物多様性は急速に失われてきました。メダカやマルタニシなど、田んぼさえあればどこでも見られた生きものが、今ではレッドリストに掲載されています。そんな状況なのに、2021年に農水省が公表した「みどりの食料システム戦略(以下、みどり戦略)」によって、田んぼの生きものをさらに激減させる危機が訪れています。みどり戦略は、農林水産分野の温暖化対策をまとめたもので、生物多様性の視点がありません。農水省は別に農水省版の生物多様性戦略を公表していますが、両者は別個に策定され、トレードオフの関係にある取り組みについては、課題整理や解決策について議論された形跡はありません。こうした姿勢は先進諸国の中では極めて特異なものです。自然環境は国の大切な財産であること、持続可能な社会の礎であるとの認識が完全に欠落していることには驚かされます。

みどり戦略の中で生物多様性を損なうと危惧されている方針のひとつに水田の「中干し延長」があります。みどり戦略では～水田からは温室効果ガスのひとつである多くのメタンが発生している(畜産分野よりは少ない)。有機物が酸素に触れない状態で分解されるとメタンが発生するので、田んぼ



〈オタマジャクシ〉上陸まであと少し。前肢が出るまでちょっと待ってね。



〈アキアカネ〉羽化した後はしばらく田んぼで過ごす。



〈ナマズ稚魚〉田んぼで大きく育っていく。中干し延長で多くの個体が死んでしまう。

を乾かすと良い。 中干しの期間を従来よりも1週間～10日間延長せよ。～というのが彼らのストーリーです。「中干し延長」は生きものを育む田んぼづくりにつながりますが、「中干し延長」は湿地の破壊命令といえます。実際に「中干し延長」によってカエルが激減してしまった地域が出始めています。

根本的には過剰な有機物が土中にあるからメタンが発生します。少しでも酸素があればメタンを生成する微生物は活動できないので、ふゆみずたんぼの水中で分解される稲わらもメタンは出しません。

前年秋に稲わらを田面にすきこむことをやめ、別の場所で堆肥化してから利用すれば「中干し延長」よりも多くのメタンが削減できます。「中干し延長」によってメタンが減ったとしても、水田の土を乾かしすぎると収量が落ちたり、イネによるカドミウム吸収量が増えたりします。これらは農水省の資料にも明記されています。ほかにもメタンよりも強力な温室効果を発揮する一酸化二窒素が発生します。生きもの以外にも様々な変化があり、かなり無理のある対策なのがわかります。

これを後押しするのが現在検討が進められているJ-クレジットの中干し延長のメニューです。温暖化ガスの排出企業から、「中干し延長」によってメタンを削減した農家に対してお金を支払うものです。その前提として秋に稲わらをすき込むことになっていますが、稲わらをすき込まなかった農家には支払われないとされています。メタンを発生させる仕組みをわざと作り、より多くのメタンを排出したところへお金を支払う仕掛けが真剣に議論されています。

自然の湿地でもメタンが大量に出ているのでしょうか？イネを含む水生植物には地上部から根に酸素を送る仕組みが体に備わっていて、根が無酸素の環境にならないような働きがあります。もしメタンが出てきても、メタンを栄養にしている微生物がメタンを分解します。生きもの自身の活性や多様性を高めることこそが、メタンの削減につながります。生きものを育む農業による田んぼづくりが、生物多様性を向上させる上でも、気候変動対策としてもとても大切なのです。

第4回ミニフォーラム「田んぼのOECM/自然共生サイトへの登録～その可能性と課題～」報告

ラムネットJ理事 安藤よしの

ミニフォーラムシリーズは水田目標2030の中で優先的に取り組むべき課題について、情報の共有と意見交換を通じて、議論を深めていくことを目的に開催しています。第4回では、昆明・モンリオール生物多様性枠組みの行動目標3「陸・水・海の30%を人と自然の共生する地域として守り、管理する」の中でも、OECM(保護地域以外で生物多様性保全に資する地域)・自然共生サイトについて、環境省担当者に話題提供していただくとともに、ラムネットJが登録地として推薦したいと考える民間稲作研究所/稲葉農園の事例紹介をもとに、水田地域の登録に向けた意見交換を行いました。



民間稲作研究所のビオトープ

開催日は9月22日(金) 18:30～20:15、オンラインのフォーラムに54名の参加がありました。

まず環境省自然環境局自然環境計画課・蒲地紀幸氏に「OECM/自然共生サイト、枠組と推進」を、民間稲作研究所・館野廣幸氏に「民間稲作研究所の生物多様性を育む農法と農場周りの生物多様性向上のための取り組み」を発表していただきました。この2件の発表資料はラムネットJの田んぼの生物・文化多様性2030プロジェクトHPに掲載していますのでそちらをご覧ください。

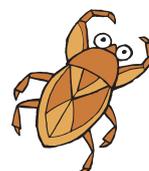
第2部の質疑応答/意見交換では環境省蒲地さんに対する質問として・登録の基準(面積等)・登録によるサイトの開発に規制が掛かるかどうか・今後の進め方・登録への意欲を高めるための助成等の仕組み・他省庁、特に農水省との連携などの質問が出されました。農水省との連携に関して会



蒲地紀幸さん



館野廣幸さん



場から、農水省内でどういった農地が共生サイトに相応しいかなどの検討をしており、OECMについては前向きに取り組んでいくという発言がありました。民間稲作研究所の館野さんに対しては「カエル等田んぼの生きものがどのように米づくりに役立っているか」「慣行農法と比較して収益の差があるか」「農家としてOECM/自然共生サイトをどのように捉えているか」等の質問が出されました。館野さんのかえる農場では、カエル等、田んぼの生きものの働きにより農薬は不要、自家製の発酵堆肥や草のすきこみで化学肥料も不要であり、米は高価格で売れるので、慣行農法と同等の収益があるとのこと。農家にとってのOECMに関しては、「また耳慣れない横文字が出てきて、面倒な申請書を提出することになるのか」と冗談を交えながらの感想でした。

第2部の最後にラムサール・ネットワークからの事例紹介として、船橋玲二さんが「大分県における生物多様性を重視した地域づくり」を、呉地正行さんが「韓国の生物多様性管理

契約制度（韓国環境部が行う環境直接支払い）」を報告しました。これらは地域の保護区以外の重要な自然地域を登録して保全し、また環境保全型農業を実施する農家を支援するための先進的な施策であり、OECM/自然共生サイトをすすめるにあたり、参考にして欲しい事例です。

このようなOECM/自然共生サイトの仕組みを、確実に現場の生物多様性の向上に結びつくものへとしていくために、これからも関係者と環境省・農水省などとの意見交換の場を設け、議論を続けていくことが大切です。



農場のカエル

ラムサールブランド『シギの恩返し米』の取り組み

佐賀市役所 東与賀支所 総務・地域振興グループ 福岡 正和



東京・神楽坂「AKOMEYATOKYO」での販売

東与賀町は佐賀県佐賀市の南部に位置し、その有明海沿岸部には日本一のシギ・チドリ類の渡来数を誇る豊かな干潟として2015年、ラムサール条約湿地に登録された「東よか干潟」があります。

ここ、東与賀町は面積1,539haのうち約1,000haを農地が占める農村地帯です。

東与賀町では、長年、多くの農家が農薬や化学肥料を減らしてお米づくりに取り組んでいます。その取り組みが東与賀町のクリークなどの自然を守り、そして、その水が注ぎこむ有明海の豊かな環境も守られています。

シギの恩返し米は、この豊かで美し

い東与賀で自然と生き物、そして人がいつまでも共生することを目的としたプロジェクトから生まれた特別なお米です。

このシギの恩返し米は、これまで東与賀町で特別栽培米として生産されていた「夢しずく」をベースに、より無農薬栽培に近づけ自然を守るために環境保全型農業や環境循環型農業に取り組んでいます。

その栽培方法としては、化学合成肥料を無くし下水道由来の「じゅんかん発酵肥料」を使用することで旨味、品質、収量が向上しています。また、防除についてもキトサンなどの有機物を使うことで化学合成農薬を当地比で8割程度削減し、環境の保全に取り組んでいます。

さらに、東よか干潟に関連した取り組みとして、佐賀平野では稲作が終わった後の圃場では、麦の栽培がおこなわれるところですが、稲刈り後の圃場に再び水を張り、冬場に訪れる渡り鳥や水鳥たちの餌場やねぐらとなるようにして、生き物との共生に取り組んでいるところです。この取り組みは「冬



消費者との田植え体験会

みずたんぼ」と呼ばれ、生物多様性の保全と同時に、その後の水稲の初期生育に効果があり、実施圃場のお米については食味値の向上が確認されています。

そして、東よか干潟近隣の試験圃場では冬みずたんぼと同時に「水田魚道」を設置し、水生生物が水路と圃場を行き来できるようにし、更なる生物多様性の保全に取り組んでいます。

このシギの恩返し米での取り組みを広めていくため、6月には消費者を招いて田植え体験会を開催し、農業の大変さや環境保全の大切さについて普及啓発しているところです。また、地元の小学校には新米が収穫された10月中旬より、米飯給食時にシギの恩返し米を食べてもらい、提供期間中には月1回程度「シギの恩返し米のお話し」と題して農業や環境保全、ラムサール条約の普及啓発を行っています。(昨年は私がハマシギの被り物を被って講話させてもらい、各教室も回って大好評でした。)この他にも、シギの恩返し米の販売促進活動の際にはラムサール条約等の普及啓発も行っているところです。

今年からの新たな動きとして、鹿児島県出水水平野でのツル



東与賀小学校での普及活動

の大量死を受け、一部の冬みずたんぼにおいてツルの越冬地の分散に取り組む予定です。この事業により、水鳥だけでなく幅広い生態系の保全や地元の環境教育の推進に繋がります。

今後は、「シギの恩返し米」の取り組みを普及拡大し、いつまでも東よか干潟や東与賀町の素晴らしい自然を未来につないでいけるように頑張っていきたいと思っています。



〈水田部会からのお知らせ〉

■第6回生物の多様性を育む農業国際会議 (ICEBA) の開催について

開催日時:11月18日(土) 13:30~全体会

11月19日(日) 9:00~分科会

13:00~エクスカージョン(希望者のみ)

会場:あいぼーと佐渡(新潟県佐渡市両津湊384-11)

全体テーマ:「トキと共生する佐渡の里山」から始まる新・生物多様性農業

参加費:無料

申し込み:QRコードからお申込みください。



■田んぼの生物・文化多様性2030プロジェクト地域交流会 @小松島市(第7回ICEBAイベント)

日時:2023年10月28日(土) 13:00~17:00

会場:JA東とくしま「農業研修室」

徳島県小松島市立江町字大田ノ浦11番地の14

全体テーマ:生きものと歩む徳島の米づくり

参加費:無料

申し込み:QRコードからお申込みください。



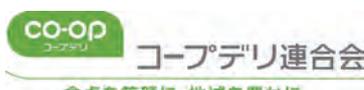
【編集後記】

とんでもなく暑い夏でした。気候変動が生物多様性に与える被害は大きい、だから温暖化対策を! という声が大きくなっています。しかし、健康な土壌・泥炭地・マングローブ・塩生湿地・干潟等が持つ炭素隔離能力や、災害リスク緩和を助ける働きなどを評価し、生物多様性保全のために行動することも重要です。1992年の国連環境開発会議で署名された気候変動枠組条約と生物多様性条約は、車の両輪にたとえられます。生物多様性の劣化で車が傾き、車上の全てのいのちが振り落とされてしまわないように。

安藤 よしの

※田んぼだよりへのご意見、活動情報等をラムサール・ネットワーク日本事務局までお寄せください。

また、田んぼだよりをPDFファイルでのみ受け取りたいという方は、その旨事務局までお知らせくださるようお願いいたします。



田んぼ2030プロジェクトは、企業からの支援をいただいています。
このニュースレターは、2023年度地球環境基金の助成を受けて作成しました。

